

残響

高知市 大崎正徳

八月だというのに、母さんの墓は雪の結晶で覆われた砦みたいにきらきら光っていた。朝に強い雨が降ったからだ、と父さんが言った。雨はもう止んでいて、太陽の帰還で息を吹き返した無数の蟬の戦陣が、砦めがけてけたましく鳴きわめていた。

夏に母さんの墓参りに来たのは四度目だった。母さんの墓は山の傾斜から海を見渡すようになっていて、この時期でも涼しい風が吹いた。目を細めて遠くを見ると、空の青と海の青が一つに繋がって見え、船が空を飛んでいるように見えることもあった。

ぬかるんだ赤土にぱたぱたと零を落とす深緑色の植物を手早く新聞紙に包みながら、シキミとい

うその植物が毒をもつてることを、父さんはいつものようにぼくに説明した。初めてその話を聞いたとき、毒の葉に触れる父さんの姿に怯えて仕方なかった。でもあれから四年が経ち、ぼくは十一歳になっていた。シキミはもう怖くはない。

父さんは首に掛けているタオルで頬の汗を拭つた後、口ひげを揺らすくらい深い鼻息を吐き出し、母さんの墓を見つめた。父さんは、台所で料理を作り作る母さんの背中を見つめているかのように、愛おしげで、もの言いたげな表情をしていた。でもそこに味噌汁や肉じゃがの匂いではなく、あるのは草と土とほのかな雨の匂いだけだった。

ぼくも父さんの真似をして深い息を吐き、母さんの墓の前で手を合わせた。目をつぶると夏の気配がぐっと近づいてきて、太陽や蟬の位置がよりはつきりと把握できた。次第にぼく自身が夏の一部となり、空と海とが水平線を超えて混ざり合うようには、ぼくの身体が夏という色の中にとけ込んでいく気がした。そしてその色の中には母さんも

シャツの袖の匂いを嗅ぎ、自分の身体がブルーの匂いくないか一度確かめた後、校舎の中にそろりと入っていました。

最上階への階段を上がる頃には、とーんの正体はもう見破つて、いや聞き破つていた。

音に近づいていく程に、とーんはもつと複雑な響きに変わり、とーんたんとんであつたり、たつたんたんであつたりしたのだけれど、とにかくそれはピアノの音だった。誰の曲かはわからなければ、一定のリズムの中にメロディーが乗っていて、とても綺麗な曲だった。時々囁くように静かになつたり、時々跳ね上がるよう大きくなつたり、まるで何人かの人が交代で各々の感情を語り合っているような、そんな曲だった。

ぼくはいつのまにか音楽室の目の前に立つていた。音楽室のドアには大きな丸窓がついてあつたけれど、この位置からはピアノが見えなかつた。ぼくはドアが音をたてないよう蛙みたいに両手をそろりとドアに張り付かせ、丸窓におでこをへばり付けてめいっぱい眼鏡を右に動かしてみた。自

分の鼻息で曇った丸窓からほのかにブルーの匂いがした。

ピアノを弾いていたのは女の子だった。

ぼくと同じ年ぐらいだろうか。真夏なのに餅みたいに肌が白くて、たまご形の眼鏡をかけている。女の子はちら向いて座っていたけれど、目線はずっと手元にあって、ぼくの方には気付いていない様子だった。時折同じフレーズを違う抑揚で弾き直したり、一旦手を止めて譜面らしきものをぞき込んだりしながら、無くした何かを探し求めるようにピアノに向かっていた。誰かと話していられた瞬間を見計らって、ぼくはドアから手を離した。そして汗で湿った手のひらをズボンで拭き取りながらそつとその場を離れた。途中何度も振り返る

いた。母さんはぼくの正面に立つて冷たい麦茶を注いでくれていた。母さんは生きていた。ぼくは歓喜し、麦茶に手を伸ばした。そのとき、とーんという音が微妙に頭のなかに響いた。

その音は、先週の水泳教室の帰りに学校で聞いた音だった。五年生にもなつて二十五メートルを泳ぎ切れないでいたぼくは、夏休みを利用して開かれる水泳教室に通わされていた。いわゆる赤帽組と呼ばれるやつで、バタ足は膝を曲げずにだとか、息つきは腕を振り下ろした時にだとか、下級生がやるような練習を繰り返し仕込まれる。泳ぎの下手な子にとっては教室というよりも罰ゲームみたいな内容だった。

その日も過酷な練習を終えたぼくは、いつものようになじみの校舎を抜けて帰ろうとした。正門とは逆方向だったけれど、ぼくの家までは東門から出た方が近道だったし、ちょうど西に傾きはじめた灼熱の日射しを避けるにはその方が好都合だった。それに、赤帽組でも一応上級生のプライドというものもあった。ぼくはなぜか反射的にT

ぼくを、廊下に響くピアノの音がやわらかく包み込んだ。

「ぼく、どうしたんだ」という背後からの声に、ぼくは飛び上がりそうになつた。ちょうど二階から一階に降りようとした時に、その低い声はぼくを捕まえた。

振り返ると用務員の小池さんが立つていた。小池さんは大仏みたいなヘアースタイルで通称パンチさんとも呼ばれていたけれど、その風貌とは異なり、生徒から慕われるとしても温厚な人柄だった。それにぼくの父さんはむかし草野球の試合をしたとかなんとかで、時々学校でぼくに話しかけてくれることもあつた。

「あれ、よしくんやんか。どうしたんだ」と、パンチさんはぼくに近づきながら穏やかに言つた。

「音楽室からピアノが聞こえて、気になつて見に行つてたんです」と、ぼくはさつき見た女の子の赤い髪を思い浮かべながら正直に答えた。

「ああ、きえちゃんか」と、パンチさんは額きながら言つた。でもその表情は何処かしら寂しそうにも見えた。とーんと微かなピアノの音がぼくとパンチさんの頭上を漂つた。

きえちゃんについて教えてくれた。ぼくより一つ上の六年生だということ、石巻という町で暮らしていたけれど津波で家が流され、親戚に引き取られて高知に移り住んだこと、時々こうして休日の音楽室でピアノを弾いていること、きえちゃんについて教えてくれた。

ぼくより一つ上の六年生だということ、石巻という町で暮らしていたけれど津波で家が流され、親戚に引き取られて高知に移り住んだこと、時々パンチさんの頭上を漂つた。

それからパンチさんは、その音の持ち主であるぼくより一つ上の六年生だということ、石巻という町で暮らしていたけれど津波で家が流され、親戚に引き取られて高知に移り住んだこと、時々パンチさんの頭上を漂つた。

こうして休日の音楽室でピアノを弾いていること、きえちゃんについて教えてくれた。

ぼくより一つ上の六年生だということ、石巻という町で暮らしていたけれど津波で家が流され、親戚に引き取られて高知に移り住んだこと、時々パンチさんの頭上を漂つた。

それから何日もの間、パンチさんから聞いた話を弾いているのはきえちゃんのお姉さんが好きだった曲であることを。

それから何日もの間、パンチさんから聞いた話を弾いていた。きえちゃんといふ名の女の子のことを。

が頭の中を離れなかつた。そして丸窓から見えた女の子の顔を何度も思い浮かべた。たつたひとりの音楽室で、何かを探し求めるようにピアノを弾いていた、きえちゃんといふ名の女の子のことを。

日を開けるとやつぱり母さんはいなかつた。そこにあるのは母さんの名前が刻まれた墓と、さつき父さんが並べた紙コップの珈琲、いくつかのお菓子、白いユリの花、そしてシキミだった。父さんはさつきから一滴も減っていない珈琲を母さんはさつきからぐつと飲み干し、行こうか、と静かにぼくに言つた。

家に帰った後、ぼくは学校に向かつた。日の暮れ始めた校舎には人の気配がなく、きえちゃんのピアノも聞こえてこなかつた。ぼくは素早く東校舎に入り、階段を駆け上がつた。そして音楽室に誰もいないことを確かめた後、ドアを開けて中に入り、ピアノの前に立つた。弾き方はわからなかつたけれど、人差し指で白い鍵盤をいくつか適当に押してみた。思った以上に大きな音がして、振動がお腹まで響いてきた。やがてその振動は心臓や喉を通つて頬つべたやまぶたに伝わり、それまで堪えていた涙をどつと溢れさせた。

きえちゃんがどんな気持ちでこのピアノを弾いていたのか、ぼくにはその理由がちゃんとわからなかつた。ただ、次第に減衰していくピアノの響きは、自分の中で少しずつ薄れていく記憶に似ていた。音はやがて滲むように風景に溶け、静寂だけがそこに残つた。お姉さんが好きだった曲、きえちゃんはその曲を何度も奏でることで、薄れていくお姉さんの記憶を、心の中に繋ぎ止めようとしていたんじゃないだろうか。

ぼくは母さんを思い浮かべた。忘れかけていた母さんの顔や声を、できる限り鮮明に思い浮かべてみた。そしてもう一度鍵盤を押さえた。さつきよりも強く。西日が差し込み始めた音楽室はオレンジ色に染まり、濃くなつた光と影の境界線の上で、ピアノの残響が泡のように漂つっていた。

私は高知市私立中学に通つていた。「じゃあ、お願ひしていいかなあ。本を買いたいの」「いいですよ。何という本ですか?」「レーチエル・カーソンの『生と死の妙薬』といふ本なの」

彼女は著者名と本の題名を紙に書いて、本代と一緒に理容店で散髪をして貰つた。西村くんは高知の本屋に行つたりするの?」「はい。学校から帰る時にときどき行きます」

私が中学生になつた頃、山田理容店に若いお嬢さんが九州からやつて來た。若奥さんは善良そうである。店主の山田さんは二十歳そこそこの青年だった。彼は地元を離れ、九州の理容学校を卒業して、店は開店した。昭和三十年代の終わり頃のことである。店主の山田さんは二十歳そこそこの青年だった。彼は地元を離れ、九州の理容学校を卒業して、帰郷したばかりだった。

良い香りの店内、新品の理容椅子、きれいで磨いた大きな鏡、なめらかなクリーム色の洗面台、何から何までが真新しく輝いていた。子どもたちにとってうれしかつたのは、散髪をもらえたことである。読んでいるとキャラメルをくれたり、ラムネやジュースを飲ませてくれた。山田理容店のサービスの良さは地元で有名になり、少なくとも、何種類もの少年漫画雑誌を読ませてもらえたことである。奥さんから個人的な頼みごとをされたことで、私は誇らしい気持ちになりました。うれしかつた。

翌日、行きつけの本屋で注文し、三週間後に頼まれた本を奥さんに届けることができた。その後しばらくの間、その本のことなくロマンチックな題名と純朴な彼女のイメージが、頭の中で重なつたり離れたりしていた。

奥さんの思い出をもうひとつ。私が東京の大学生活を終えて、ふるさとに帰つて初めて山田理容店に行つた時のことである。(その店で最後に散髪してもらつてから二、三年ほどたつた)と思ふ。今年の春、私は六十歳で定年退職した。朝夕の国府川沿いのウォーキングが日課である。歩きな

芸術祭文芸奨励賞二編

散 髮 屋

南国市 西 村 雅 人

子どもの時から、ずっと同じ理容店で散髪をし始めた。小学生の頃は、後頭部の生え際と両耳のまわりを一気にバリカンで刈り上げ、あとはハサミとクシを使ってチョキチョキと手早く切つたものである。あの頃の店内に響いていた散髪バサミの心地良いリズミカルな音が、半世紀の時を超えて、記憶の底から私の耳によみがえつて来る。

中学、高校は丸坊主だったので、バリカンだけですんだ。途中で反抗期に入り、あまり物を言わなくなつた私に、店主はバリカンをかけながら、何気ない話題で話しかけてくれた。東京で大学生生活を送るようになると、長髪に無精ひげの私は、帰省するたびに、親に言われて散髪に行かされた。

大学を卒業し、高知に帰つて勤め人になつてから

も、ずっとその店で髪を切つてもらつた。

6

5

彼女は親しみを込めてにっこり笑い、「お帰りなさい、西村くん。お久しぶり。就職おめでとう!」

「いいですか?」「いいですよ。何という本ですか?」「レーチエル・カーソンの『生と死の妙薬』といふ本なの」

彼女は著者名と本の題名を紙に書いて、本代と一緒に理容店で散髪をして貰つた。西村くんは高知の本屋に行つたりするの?」「はい。学校から帰る時にときどき行きます」

8

7

がら、五年前の出来事を時々思い出す。

その日、予約をするため、山田理容店に電話する。「今日はもう疲れて店じまいしたがよ。明日の朝おいで」と店主は妙なしゃがれ声で言った。

声に元気がなかった。

翌朝、店に行くと、普段は店先でグルグル回っている赤と白と青のサインポールが止まつていて、店内に照明がついていなかつた。薄暗い店の中に入ると、山田さんがソファーからしんどうに立ち上がって、私は理容椅子に座るように手で促す。

「店を休みにしてあるから、電気を消して散髪するきね。電気がついちよつたら客が入つて来るかもしだんから」山田さんの声は消え入るようになります。力がなかつた。私だけ特別に散髪してくれようである。

学生だった頃と同じ手順で散髪はおこなわれた。ハサミはチヨキリ、チヨキリと、今にも止まりそうなくらい遅かった。

「おまんの散髪がすんだら、病院に行つて入院す

るき。糖尿病じゃ」

「ええ? 入院する日に仕事をさせてしもつて:

「言つてくれたら頼まんかつたに…」

「かまん、かまん。入院する前にやりたかつたがやき」店主は満足そうに言つた。

散髪が終わつて店を出る時に、「絶対に良くなる

てくださいね。待ちゆうきね」と、私は山田さん

の目を見ながら言つた。彼は黄色で黄色くなつた顔をこりとさせて、うなずいた。

私は山田さんが退院して店を再開する日を待ち続けた。店の前を車で通る時は、いつも三色のサインポールが回つていなかつた。結局それは二度と回ることはなかつた。山田さんの死は、父から聞いた。「あの散髪屋さんは、入院して間もなく亡くなつたそうじや。はやすぎるねえ:」

私は近くを通るたびに、白い壁と三角屋根の瀟洒

山田さんが亡くなつて五年が過ぎた。主のいない店の最後の客になつてしまつた。

山田さんが亡くなつて五年が過ぎた。主のいない店の最後の客になつてしまつた。

山田さんは亡くなつたそうじや。はやすぎるねえ:」

私は近くを通るたびに、白い壁と三角屋根の瀟洒

まだ私はぼんやりしていた。

高校二年生最後のホールーム、クラスメイトはみんな次のクラス替えの話題で持ちきりで、いつも

もより落ち着かないものだつた。私もその話題に

加わつていたものの、仲間に同じ進路になる者

はいなくて同じクラスになりそつになかつた。そ

れでも一通り別れを惜しんで思い出話に花を咲かせた。そして数日前と同じようにぼんやり中庭を眺めた。雨が降つていて。

私は山田さんが亡くなつて五年が過ぎた。主のない

店の最後の客になつてしまつた。

山田さんは亡くなつたそうじや。はやすぎるねえ:」

私は近くを通るたびに、白い壁と三角屋根の瀟洒

シャツタ一

土佐高等学校二年 西 更 紗

自分がない。これは私にとつて最大のコンプレックスだつた。

高校二年生の終わりごろだつただろうか。ほん

ぞつとして、急いで廊下に飛び出してみたけれど

やつぱり誰もいなかつた。取り残されるつてこう

いうことなのだろ。考えることが怖くなつて荷物をまとめて薄暗い学校を後にした。

それから何日たつたかなど到底覚えていないが、

終業式の日を迎えた。その日は空一面に重い雲が

ぞつとして、急いで廊下に飛び出してみたけれど

やつぱり誰もいなかつた。取り残されるつてこう

いうことなのだろ。考えることが怖くなつて荷物をまとめて薄暗い学校を後にした。

それから何日たつたかなど到底覚えていないが、

終業式の日を迎えた。その日は空一面に重い雲が

ぞつとして、急いで廊下に飛び出してみたけれど

やつぱり誰もいなかつた。取り残されるつてこう

いうことなのだろ。考えることが怖くなつて荷物をまとめて薄暗い学校を後にした。

用件は春休みの宿題に關することだつた。短編

小説を課す、それだけだつた。本当の意味で受験

生になろうとしているこの時期にどうして、と思

て、すぐに投げ出してしまつた。「普通」つて本

当につまらない。

ベッドから隕月を見ながら眠りに落ちる前にも

少しだけ考えてみたが、夢見がちな表現だとか氣

取つた表現だとかそういうものばかりだつた。自

分のどこを探しても言葉は見つからなかつた。い

い加減嫌気がさして、ぎゅっと目を瞑つて寝つた。

よく眠つた。

これを合格前の最後の遊びにするという友達に

誘われるままに遊びに岡かけ、数日の間この小説

の課題から無意識のうちに遠ざかつていて。

三つ下の弟の陸上の地区大会だと何か言い

ながら両親と弟は早朝から出でていき、家は珍しく

静けさに包まれ、ふと課題を手にした。向き合お

うと思った。

変わらず美しい風景を文字にしようとした。

私は「桜」という名前だつたから桜には思い入れ

が強かつた。

「春と言えばやつぱり桜かな」

そう呟いて思ひ浮かべられた景色は、嫌にふわ

ふわした甘ったるいピンク色がただ一面に広がっているだけだった。愕然とした。今まで大事にしてきた自分の一部を否定された気がした。それと同時に自分という存在がいかに空っぽであったかということに気付いた。覚悟して私は考え続けた。

素直に表現できない自分、友達にさえ本心を言えない自分、笑つてごまかす自分、なんとなく日々を過ごして、個性がない自分。泣かないし怒らないけど愛想笑いはたくさんしてきた気がする。遠慮もたくさんしてきた気がする。一七歳ながら度から自分について積極的に考えようとした。

ラジオのお悩み相談室、インターネットの心理テスト、あまり多くは眠らなかつたけどたまに見る夢の夢占い。色々な手段を使って、いろいろな角度から自分を見つめた。

でもやっぱり答えは出なかった。そもそも答えなどないのかもしれないと思った。研究者ってこんな感覚なのかなと思ってみたりそんな楽観的な

ふわした甘ったるいピンク色がただ一面に広がっているだけだった。愕然とした。今まで大事にしてきた自分の一部を否定された気がした。それと同時に自分という存在がいかに空っぽであったかということに気付いた。覚悟して私は考え続けた。

素直に表現できない自分、友達にさえ本心を言えない自分、笑つてごまかす自分、なんとなく日々を過ごして、個性がない自分。泣かないし怒らないけど愛想笑いはたくさんしてきた気がする。遠慮もたくさんしてきた気がする。一七歳ながら度から自分について積極的に考えようとした。

ラジオのお悩み相談室、インターネットの心理テスト、あまり多くは眠らなかつたけどたまに見る夢の夢占い。色々な手段を使って、いろいろな角度から自分を見つめた。

でもやっぱり答えは出なかった。そもそも答えなどないのかもしれないと思った。研究者ってこんな感覚なのかなと思ってみたりそんな楽観的な

自分を恥じたりもした。

ある時ついに思ひ立った。外に出よう、と。春休みも中盤に差し掛かり思い悩むうちに桜はもう満開になっていた。

久しぶりに高校生らしく髪の毛をふんわり巻いて去年買った白くてかわいらしいブラウスを着て明るい気持ちで路面電車に乗った。

車窓から見える移りゆく風景にドキッとした。今まで見てきたはずの景色なのにこんな気持ちになつたのはいつぶりだろうか。

小さな駅に降り立つた。そして小学生のころに祖父と来た覚えのある桜が綺麗に見える小さな丘一枚撮つてみた。桜はもう散り始めていたようだつた。ふわりと優しい風が吹くとその時の思い出が蘇つた。それから私は夢中になつて桜を眺め、祖父にもらった古ぼけたカメラを手にして写真をまで来てみた。祖父がこつそり教えてくれた穴場だつた。手にした。外回りを終えて本社に戻る途中の夕方のピンク色の空。薄く細長い雲を見つけた時には天使の羽を見たようで嬉しくなる。仕事を終え、帰宅途

先で立つて手を伸ばした。そのまま空を見上げる

て視界の端に映る工場が稼働し始める。こうして一日の始まりを感じながら私も頑張ろうと勇気づけられる。

外回りを終えて本社に戻る途中の夕方のピンク色の空。薄く細長い雲を見つけた時には天使の羽を見たようで嬉しくなる。仕事を終え、帰宅途中の夜景。星はほとんど見られないがビルや街灯の光も綺麗だ。そんな素敵なお色を見た時には迷わずシャッターを押している。

気付くと夜が深まつていた。久しうりに写真を手にしてからもう何時間も考えこんでいたみたいだつた。時計の針はとっくに午前0時を回つていた。

て視界の端に映る工場が稼働し始める。こうして一日の始まりを感じながら私も頑張ろうと勇気づけられる。

外回りを終えて本社に戻る途中の夕方のピンク色の空。薄く細長い雲を見つけた時には天使の羽を見たようで嬉しくなる。仕事を終え、帰宅途中の夜景。星はほとんど見られないがビルや街灯の光も綺麗だ。そんな素敵なお色を見た時には迷わずシャッターを押している。

気付くと夜が深まつていた。久しうりに写真を手にしてからもう何時間も考えこんでいたみたいだつた。時計の針はとっくに午前0時を回つていた。

と、オレンジとピンクが少しずつ入り混じった世界が展開されていた。私がイメージしていた甘つたるいピンク色はそこにはなかつた。もっと自然な色だった。

今まで悩み思ひ詰めていたものがスッと消えた。体が軽くなつて、人がいないことを確認して少しだけスキップしてみた。そしてお気に入りのフレーズを口づさんでみた。本当にすつきりした。心が溶かされていくのを感じた。それと同時に胸に溢れる思いがもどかしくなつて今なら文字に起こせると思つた。

それからはあつという間だった。自分の思いを正直に書くことができた。清々しかつた。自分を見つめるために自分の中ばかりを探したが、やっぱり何もなくて、外の世界や周りから得ることが大事だと気付いた。自惚れかもしれないが、成長できた気がした。

小説が書きあがると居てもたつてもいられなくなつて担任の元へ急いだ。担任を見つけると素直に今までの思いを話し、正直に感謝を伝えた。も

しかしたら担任はそういう私に気付いていてこの課題を与えてくれていたのかもしれない。見透かされていたと思うと少し恥ずかしいけれど。久しぶりに晴々とした気持ちで学校を後にした。

「自分」が確立された時だった。

二十年近く経つた今、学生の日々は宝物だつたと切実に思う。あの桜舞う中撮つた一枚の写真はこれだけたくさんのことを行つても思い出させてくれる。思い悩んでいた日々のおかげで今の自分があると言つても過言ではないと思う。あの頃から私はずっと写真を撮つている。今は都会に住み、のような自然豊かな場所に行くことも頻繁はないので専ら空の写真だが、どこにいても空は美しく私を落ちつけてくれる。上京して間もないころは地元の風景が恋しくなつたけれど、今は都会の高いビルとビルの間から見える景色も好きだ。

早朝、通勤途中の橋の上から見える朝日。そし

色即是空

高
知
市

高

橋

治

もうすぐ僕もあの子の傍で
シユツ^シボシユツ^シボシユツ^シボツ^シボ
シユツ^シボシユツ^シボシユツ^シボツ^シボ

万朶の花が大地を叩き
ばんだ
力強く走る汽車が大好きだった
ある日不思議な現象に気が付いた
機関車から吐き出された黒煙が消えてゆく
どうやら空が喰つてるようだ
シユツボシユツボシユツボツボ
あの子を乗せて

7

あまたの紅葉も大地を叩くが
大地に色は残らない
やつぱり空が喰つてるようだ

少しの灰を僕に残して
あの子は煙になつちやつた
そして煙は見えなくなつた
空に喰われてしまつたようだ

耳を澄ませば聞こえてくるよ
小さな星の彼方から
野菊のような　あの子を乗せて
シユツボシユツボシユツボツボ
あの子の夢も　いっぱい乗せて
シユツボシユツボシユツボツボ

18

二人だと

高知市
國廣

聖

そうなんだ 手をつないで歩けるんだ
 君は杖で
 僕は車いす
 一人だと
 歩くのにちょっと疲れる

二人だと
 君は杖をもつてない方の手で
 僕の車いすをつかみ
 もたれることができる

僕は君に車いすを押してもらえるので
 楽ちん

君が教えてくれた素敵なこと

高知市
童眼
まさみ

そのとおりだから いのちなの
 いのちのちつて血なんだ
 ちからの中も血なんだよ
 へえ——ぜんぜん知らなかつた
 じゃあね 夏になつたら力が出てこない?
 いっぱい出るよ うれしいから
 でしょ だから夏は赤いんだ
 夏はいのちの季節なんだよ
 いのちのきせつ?
 そう みんな力が出る時さ
 体中に血をどんどん巡らせて
 よりたくさん朱くなるんだよ
 傷つけば痛いこと 嬉しいと力が出ること
 いのちの大切なこと お互いに思い合つて
 やさしく 笑顔になれちゃうんだ
 おじちゃん ありがとう
 ぼくも夏には あかくなるね

ねえ どうして夏はあかいっていうの?
 じゃあ 赤いと言えば何があると思う?
 スイカ イチゴ りんご さくらんぼかな
 食いしん坊だね 食べ物ばっかり
 ちがうよ まだいっぱい知つてるから
 はいはい じゃあ赤くて怖いものは?
 うーん こわいもの こわい こわ 血!
 そうだね 血は真っ赤で怖いよね
 ケガしたら いっぱい出てくるもん
 痛い時 見ること多いでしょ
 うん ママがいっぱい出たら死んじゃうって

私が死んだなら

私が死んだなら花になりたい
コヨウランやカサブランカやヒマワリより
早明浦ダム畔にそつと咲くコオカギやコッ
ボの花がいい

私が死んだなら木になりたい
ゴボ一根のスギやヒノキはお断わりだ
太りは遅くてもたっぷり水を含むケヤキやド
ングリを実らせて小動物を養うブナやミズナ
ラを望みたい

私が死んだなら鳥になりたい
ハクトウワシやコンドルやハクチョウには及
ばない
過疎の集落に初夏を告げ棚田の害虫をついぱ
むゴシアカツバメなら大満足だ

私が死んだなら魚になりたい
ハマチやカツオやタイは似合わない、アユや
アメゴはなおさらだ
こんまい淵で泳ぐメダカでいいしモツゴでも
いいし、今や誰もうげないイダでも又いい
私が死んだなら獸になりたい
ホツキヨクグマやムースやアフリカゾウは御
免こうもりたい
人口五百人の大川村の牧場でモグリモグリ草
を食むトサアカウシで結構だ

いやいや花だの木だの鳥だの魚だの獸だのは
贋沢だ

高知市

和

田

よ
し
み

24

もしも私が死んだならば土に、一魂の土にな
りたい
大川村よりまだ奥の細長い空の故里の土留め
をした畑でお婆があざり打つ、痩せ土になれ
れば本望だ

※コオカギ…ネム コッボ…ホタルブクロ ムース…ヘラジカ

25

ヒガンバナ

町からこの村に縁あつて嫁いできました
赤い口紅をつけていたので
村人からはヒガンバナと呼ばれています
そのことばの端々から
忌み嫌う感情が
じぶんに向けられているのがわかりました

村の女たちがしているように
一日中家事をしながら
野良仕事に精を出し
いつの間にか
鏡を見ることも
赤い口紅もしなくなりました

高知市
甫
木
恵
美

28

27

慣れない畠仕事に疲れると
近くに流れる小川で顔と手を洗い
平らな安定した石を探して
その上に腰かけて
いつときの休息をとりました
川面には
忘れかけていたじぶんの姿が映つて
揺らいでいました
ヒガンバナ
だれが植えたでもなく
ここに咲く
この花を一番好きで一番憎んでいるのは
このわたし
白く咲くことを心に決めました
村に馴染んで生きていくために
白いヒガンバナ
身体中を流れる血液は赤い花が咲いて
ドクドクと脈打っています

小さなお葬式
高知市
漬
田
喬
子

トロッコに乗り替えて地平線を走り
小舟で濁った川を渡り
荷馬車に揺られて
やつと着いた開拓団
北へ約二百五十糠の強行軍だった
S子さん あなたはその開拓団で
帰らぬ旅に出たのです
野原で摘んだ小さな花を供え
N先生の講義を聞きながら
あなたを茶毎に……
S子さんのご遺族は
悲しみや
怒りを
無言で抱きしめていた
声のない叫びは 空間を貫いて
地平線まで流れていった
広野の真ん中の 小さなお葬式

十四歳の夏
学徒動員令で配属された開拓団で
級友が短い人生を終えた
電気も 水道も 薬も無い 働地で
ハルビン駅から
汽車で北満の大平原を走り
スンガリーのほとりに佇むと
あの頃の幻影が目に浮かぶ
今でも胸が疼く
中国東北部での出来事

高知市
漬
田
喬
子

30

29

燃え尽きる炎の
最後の輝きを脳裏に焼き付けて
開拓團に別れを告げたのは
ソ連侵攻の直前
一九四五年七月下旬だった

※スンガリー：（アムール河 ウスリヤ河を経てウラジオストックにつながる中国東北部の大河）

佳 作

送 り

高知市

下

元

真

人

白胡蝶蘭 高級菓子 初めて会う親戚たち
名前忘れた 徒妹？ モゴモゴと挨拶
窮屈なズボン ちょっと尿意 まあいいか
太く短い鼻 閉じた目 まつげの白髪
そろつた前歯 入れ歯か それすら知らない
ああこんな顔 だつたのか いまさら何を
分厚い座布団 窮屈に整列
座りきれない人脈 いまさらながら
意味の分からぬ呪文 神妙な顔で

白胡蝶蘭 高級菓子 初めて会う親戚たち
名前忘れた 徒妹？ モゴモゴと挨拶
窮屈なズボン ちょっと尿意 まあいいか
太く短い鼻 閉じた目 まつげの白髪
そろつた前歯 入れ歯か それすら知らない
ああこんな顔 だつたのか いまさら何を
分厚い座布団 窮屈に整列
座りきれない人脈 いまさらながら
意味の分からぬ呪文 神妙な顔で

聞こえない耳 開いたまま動かない唇
握り返してこない指 大きな爪半月
鼻穴に白い詰め物 取り敢えず末期の水
いなくなつた悲しみよりも 足の痺れ
名前の分からぬ会釈 延々と
残された荷物の重さ 途方にくれる
あつい火葬炉冷たく 緊張した挨拶
父を送るという 一世一代の大事業
無事終わったのか 失敗したのか
わからぬまま 耳に絡みつく
聞こえない悪口 思い過ごしか
確かに聞こえた 父からのねぎらい
白い布で包んだ箱重く やれやれ
父の飲みかけた 高級ブランドイ
口にして・ふう・ 残った息を吐く

テレビをつけると お笑い番組
 高級お菓子食べながら チビチビとほろ酔い
 つい・・あはは・・ とまらぬ笑い
 さほど悲しくはないけれど
 寂しさに消せないテレビ

きらきら宝箱

高知県立高知追手前高等学校二年

重

田

雅

かけっこで一番になったこと
 逆上がりができるようになったこと
 先生にほめられたこと
 お父さんが頭をなでてくれたこと
 お母さんに抱っこしてもらったこと

みんなみんな　だいじな思い出
 だからね　ぜんぶ宝箱に入れておくの

何かいいことがある度に
 ひとつずつ　そおつと入れていくんだよ
 きらきらがいっぱいになつたら
 すごくすてきなんだよ

ときどき開けてみると
 きらきらがいっぱいになつたら
 それでね　きらきらを取り出すと
 にこにこになるよ

でもね

宝箱はそんなに大きくないの
 だからね　いっぱいになつたら
 ひとつずつ　こぼれていっちゃうの

思い出をわすれたくないから
 宝箱に入れたのに
 にこにこしてみたいから

宝箱に入れたのに

思い出といっしょに
涙がこぼれちゃう

それでも

こぼれた分をがんばってかき集めて
思い出せんぶ だいじにしたいな

37

おおい SAWAMURくん

高知市

澤

村

豊

彦

おつとろしや それから
僕と俺とは私の児なんて
悠長なことをつぶやきどころでなく
さつきから柳街をかつぼする僕を見失いそ
うだ
たそれがの街角に 犬のおしつこのよう
ちつちやい へのへのもへのちやん も書
いておこう
夕闇にまみれ 他人と他人の若者たちは
機械を凝視し 指先だけで無言のおしゃべり
に熱中する

若いお母さん お腹の児には 声に出して
日本語でかたりかけてあげてね

おおい SAWAMURAくん

透明人間になりかけた僕は 僕を必死で追

跡する

やわらかなお芋畠の下をどこまでも掘りす
すめば 地球の裏にぬけられる と去年の暮
につくつた僕のすじがきどおりに
りおで じやあね 色と地球のすきまを
くぐつて ABEちゃんがやつてくれたよ
平成な時を 平静に過してきたはずなのに
JAPANなのかNIPPONのか
なにがなんだか なにぬの
ひらがなだけが必死で戦争しているこの国
の若木の桜の花弁二片に
むとんだけを書きこみ
おおきに と僕は
夕暮の紅水川に
蟻が十歳なら 芋虫二十歳 と流してあげる
いろはにはへと 散りぬるを・・・

中学一年生

高知大学教育学部附属中学校一年

東

あ
す
か

40

なんだろうこの気持ち
新鮮っていうか
複雑っていうか
言葉に表せないようなこの気持ち

制服を整えて登校する毎日
部活の先輩に怒られてばかりの毎日
いつもと変わらない毎日
なんだらうこの気持ち
自分でも分からぬこの気持ち

身近にいる人は感じてくれる
この気持ち
中学一年生のこの気持ち
気持ちって大切だと感じたこの気持ち

41

ひこうき雲

津野町立東津野中学校一年

井

閥

翼

42

青い空
どこからきたのか
ひこうき雲

若いスケッチブック
ライン描きて 消えていく
ひこうき雲

若い青い 私の心
いついつまでもなくならない
ひこうき雲

若い水たまり
かすかに残る残像よ
ひこうき雲

43

芸術祭文芸賞一首

混沌の時代なればこそ孫の未来さきくあれとぞ祈るはちがつ

芸術祭文芸奨励賞五首

高知市 山 脇

志 津

土佐市立高岡第一小学校六年 石 元

不 破

子

夜空から落ち葉がそっと落ちてくるその葉の色は夜空の色だ

高岡郡中土佐町 谷 口 益 恵

川 上 惠

手秤に分量確かめ施肥を為す農夫の指の太き筋ぶし

高岡郡中土佐町 谷 口 益 恵

曾 根 明香里

肝試し暗闇に一人怖すぎて早く来てよと待つお化け役

曾 根 明香里

理 惠

國民に添い四半世紀の天皇の言葉あたらし象徴のかたち

高知市 山 崎 マ リ

一票を投じて帰る道に会うユニフォームの少年の自転車の列

高知市 野 村

にぎり返す力伝わる手のひらにことばを持たぬ生徒の返事

高知市 田 上 悅 子

君からの返信来たる午前二時フェイスブックは眠たげな顔

土佐塾高等学校三年 今 井 桃 子

認知症になつても彼は船乗りか部下の名を呼び船橋に立つ

室戸市 松 原 一 成 子

佳 作

もらい風呂の裸電球ほの暗く五右衛門釜に背の痛かりき

土佐清水市 不 破

子

SFのロボット攻め来るときのごと風車列なす遠山の尾根

高岡郡四万十町 川 上 惠

理 惠

芸術祭文芸賞一句

炎天や赤秀の氣根地に届き

幡多郡大月町

軍鶏を抱き戦歴を抱き夕端居

南国市

冬瓜の煮くづるるままうすみどり

高知市

山 中 則 子

49

佳作

遍路ゆく蜩の木を振りかへり

四万十市

藻の花や昔木舟の通学路

高知市

すすき野をまつすぐ行けと母の声

高知市

田 村 乙 女 西 込 と き 子

51

神楽見に十六夜の城上りけり

高知市

50

まむし酒その後の話きかざりし

高岡郡佐川町

50

尾根行くは天刑めきし露時雨

吾川郡いの町

50

月白や人の気配の近づきぬ

南国市

52

初産の馬小屋に先ず新走り

四万十市

52

手品する男も老いて敬老日

長岡郡大豊町

52

芸術祭文芸奨励賞一句

栗拾ふ日課しばらく加はれる

高岡郡日高村

無人機が戦のいろは知りたがる

高知市

富士市

田

三郎

虫めがねのぞくと小さい春見える

土佐市立高岡第一小学校五年

中村梅子

夢みたいちようちよわたしにとまつたよ

土佐市立高岡第一小学校五年

士子

北岡澤権士

遠永櫻

中村梅子

53

54

アルバムに風の座った椅子ひとつ

吾川郡いの町

高知市志保子

子

南国市

居

田

三

55

友と飛ぶ沈下橋跡蟬しぐれ

土佐高等學校二年

谷脇光太郎

満月のむこうにたつぶりの秘密

高知市

近藤

林

裕子

五番街のマリーを探すスマホ手に

高知市

濱藤

岡

土

56

めざましはぜんぜんやくにたちません

土佐市立高岡第一小学校二年

久ゆずあ

眞奈

裕子

55

佳作

矢印は迷路を向いて立っている

南国市 橋

満月に魚がいると思う雨

高知市 岡

風なのね囁き上手なんだもの

高知市 桑

いつからか行方不明になつた夢

宿毛市 江

「前・ならえ」ならつて列はくねくねと

高岡郡日高村

優しさはいらぬA Iなんだから

吾川郡いの町

森

佐

江

乃

野

口

鈴

佳葉子

桂子

58

57

オリオン座足をふり上げヨガをする

土佐市立高岡第一小学校五年

カマキリは秋のにおいをつかまえる

土佐市立高岡第一小学校五年

土食べるくいしんぼうのトラクター

須崎市立浦ノ内小学校二年

雲ひとつ残さず晴れるひみつの日

四万十市立東中筋小学校五年

中越

涼

里見忠純

川澤永遠佳

北岡忠純

59

60

短編小説審査評

今年の応募作品数は五四編。十三歳から八十三歳まで、幅広い年齢層からの応募があり、読み応えがあった。特に、十代からの応募が二三編もあり、将来に向けて心強い。

審査の結果、次の三編を入賞とした。

「残響」 四年前に亡くなった母親に想いをはせる小学五年生の男子と、津波で亡くなった姉を慕う小学六年生の女子の、交わることのないふれあいが描かれている。女子は、姉が好きだったピア・曲を弾くことで薄れてゆく姉の記憶を繋ぎ止めようとして、男子は、鍵盤をたたいて母のことを思う。その残響が西日の射し込む教室に漂っている。静かで余韻の残る作品に仕上がっているが、冒頭の文章が分かれにくく、推敲の余地があるだろう。

「散髪屋」 主人公が小学生のときから利用している散髪屋の盛衰を、主人公の成長とともに描いた作品である。昭和三十年代終わり頃の散髪屋の雰囲気や、店の若奥さんと触れたときのときめきなどがうまく描かれていて好感が持てるが、なにぶん物語の設定が五十年ほど長く、薄味な感じがするものはやむをえない。

「シャッター」

いまは東京に住む女性が、二十年近く前に

撮った一枚の写真を手に、地方に住んでいた高校一年生の自分を回想する話である。その頃の私は自分というものがなく、まわりに同調するだけの生き方だった。しかし、短編小説を書くという課題を与えられたとき、自分に正直になることの大切さを發見する。この作者は十七歳であるが、

きらりと光るものを持つている。

その他、次のような作品が心に残った。

「UFOの記憶」そしてマチコ。(岡本健二) この作者の文章力は確かであり、書かれていることがすんなりと頭に入ってくる。しかし、この小説で何を伝えたいのか、それが見えてこないのが残念であった。

「さなぎ」(やまだかり) 母子家庭の親子の関係が描かれている。原稿用紙七枚と短めだが、そこに込められたもの力強い。しかし、なぜ文章の途中で改行したり、ある言葉をカタカナにしたりするのか、その理由がわからなかつた。推敲の余地があるだろう。

「ダイブ!」(柴田由) この作品は読みやすい。読みやすいのは作者の力量だが、それだけではなにか物足りない。もつと心をゆさぶられるものがほしかった。

(審査員——杉本雅史、米沢朝子、文責・若江克己)

詩審査評

作品は二三六編。五歳から八十三歳まではばひろい応募があった。

文芸賞は高橋治光「音即是空」。愛しい子供との別れも「シユッポッポ」という音にたどえ、別離の辛さや悲しさをうまく表現している。いつの世も太古から、空は人生の喜怒哀楽を喰っているのだが、その着眼点がいい。最後の一行為は余分だと思う。

奨励賞は五編。國廣聖「一人だと」。生き苦しい時代である。耳をすませば、ファシズムの足音が聞こえてくる時代である。科学技術に支えられた高度に発達した資本主義社会のなかで、多くの人々が、こころと身体を病み、蠢いている時代である。その中でこの詩のようには、「生きてゆけない一人といわす手をつなぎ支えあねなければ、死んでゆけない時代が、もうとっくに来ているのに。皆みたくない知りたくないのだ。二人だと／一人だと／一人なら、世界はもっと広がって目の前に現れる」。わたしなら最後の一行為

童眼まさみ「朱夏」。夏の朱と果物の赤と血と命と力を結びつけて、上手に書きあげている。夏に力でのない人の血は何色かな。和田よしみ「私が死んだなら」。死んだなら生まれ育つた

土地の花や木や動物になりたいという。いやいや、「一塊の土になりたい」とい「故里の土留めをした畑でお婆があ

ざり打つ、瘦せ土になれば本望だ」という。悟りとはある種の諦めかもしれない。この世は何かを諦めないと生きてゆけないのだ。みごと。

文芸賞は高橋治光「音即是空」。愛しい子供との別れも「シユッポッポ」という音にたどえ、別離の辛さや悲しさをうまく表現している。いつの世も太古から、空は人生の喜怒哀楽を喰っているのだが、その着眼点がいい。最後の一行為は余分だと思う。

奨励賞は五編。國廣聖「一人だと」。生き苦しい時代である。耳をすませば、ファシズムの足音が聞こえてくる時代である。科学技術に支えられた高度に発達した資本主義社

会のなかで、多くの人々が、こころと身体を病み、蠢いて

いる時代である。その中でこの詩のようには、「生きてゆけない一人といわす手をつなぎ支えあねなければ、死んでゆけない時代が、もうとっくに来ているのに。皆みたくない知り

たくないのだ。二人だと／一人だと／一人なら、世界はもっと

広がって目の前に現れる」。わたしなら最後の一行為

童眼まさみ「朱夏」。夏の朱と果物の赤と血と命と力を結

びつけて、上手に書きあげている。夏に力でのない人の血

は何色かな。和田よしみ「私が死んだなら」。死んだなら生まれ育つた

62

61

俳句審査評

応募七六五句で前年比二二六%、応募人数は一九八人で二二三%であった。応募人数の倍増は、小中学、高校生の応募増によるもので、先生方のご指導や部活の成果である。

最高齢九十五歳、最年少八歳であった。三審査員が予選した八三句について検討し、文芸賞一句、文芸奨励賞五句、佳作十句を決定した。

炎天や赤秀の氣根地に届き、柴岡弘城

文芸賞は

「赤秀」は、クワ科の亜熱帯高木で高さ約一〇m、幹の周囲から氣根を出す。県内では、室戸岬や足摺岬、大月町で自分が見られる。

「炎天」は万象を威圧するような炎気だが、眼前の赤秀は氣根を降々と地にまで届かし、毅然としたもの。厳しい季語に赤秀の実相を配して、植物の生命力の強さと風土性を濃く詠んで格調高い。

文芸奨励賞には次の五句を選んだ。

「夕端居」は、夏の夕方、涼をとるために綾先などに出

ること。闘鶏師でもあるのだろう。引き締めた風貌の人があ

思われる。軍鶏を抱いて戦争で戦

を行くのは「天刑」を受けるような一種の孤絶感。妥協を許さずに行く意志強い作者がでている。

(審査員——橋田憲明、味元昭次、文責・松林朝蒼)

64

63

地を経験した人。激動の時代を越えてきた男の姿を表出している。

冬瓜の煮ぐつるるままうすみどり

山中則

「冬瓜」は、味も香りも淡白だが、含め煮や冬瓜汁にして

だしを十分に吸わせると美味。果实は淡緑で煮ると透き通つてくる。煮込んでいる様子で、変化をよく捉えている。

神楽見に十六夜の城上りけり

大窪雅子

お城まつり」が高知城で行われ、各地の神楽が催されている。

そこには伝統芸能と照應する趣があつていい。

まむし酒その後の話かざりし

竹崎いと

「まむし酒」は、強壯剤として効用があるといわれてい

る。揚句さして深刻な場面ではなく、酒席などで余興的

に飲み、話が出たのではないか。洒脱、機微に触れて面白

い。

尾根行くは天刑めきし露時雨

山下正雄

中七から單独登山のように思われる。「露時雨」は、時雨が降ったたよに地上のものが濡れた様子。そのような尾根

を行くのは「天刑」を受けるような一種の孤絶感。妥協を

許さずに行く意志強い作者がでている。

(審査員——橋田憲明、味元昭次、文責・松林朝蒼)

水い間農業に従事してきた農夫のある日常の一端をさりげなく詠んだ一首。初句と結句が効いて、作者の温かさが伝わってくる。

国民に添い四半世紀天皇の言葉あたらし象徴のかたち

山崎マリ

ご高齢の陛下は生前退位についてメッセージを発表され、

土佐高等学校、高知追手前高等学校、高知専門の六校。

文芸賞

混迷の時代なればこそ孫の未来さきくあれとぞ祈るはち

だ

山脇志津

今年自衛隊はすでに実働訓練を行ってい

る。七十二歳の作者は、孫の未来と日本の未来を憂い無事

であれよと祈っている。日本人にとって八月は特別の月。

結句を日本特有の仮名書きとして、作者は思いの深さを強調している。其感を呼ぶ一首。

(順番は、受付番号順)

漁港の町に住む作者は、認知症の友の事実のみを伝えて夜空から落葉がそっと落ちてくるその葉の色は夜空の色

だ

石元美妃

作者は十一歳。落葉がそっと落ちてくるその瞬をとら

えて葉の色を見た。夜空の色だった。表現も率直でその感

性が素晴らしい。

手秤に分量確かめ施肥を為す農夫の指の太き筋ぶし

谷口益忠

(審査員——市川敦子、梶田順子、文責・中野百世)

短歌審査評

今年は一三三名から三三〇首、昨年比一八%の応募があ

つた。年齢別には最高齢九十五歳、最年少一歳で、作

品は昨年同様五十歳以上が大半を占めている。一方学校か

らの応募は高岡第一小学校、附属中学校、東津野中学校、

文芸賞

国民の理解が得られることを切に願つてます。と呼びか

けられた。作者はこれを新しい象徴のかたちと詠んでいる。

にぎり返す力伝わる手のひらにこぼを持たぬ生徒の返

事

田上悦子

志伝達のできた瞬間を詠んだ一首。伝達の方法は、にぎり

返す力でありその瞬間の教師のよろこびと感動である。

佳作不破陽子 川上理恵 曽根明香理(十六歳)

土佐高等学校 野村季子 今井桃子(十七歳)

松原一成

国民の理解が得られることを切に願つてます。と呼びか

けられた。作者はこれを新しい象徴のかたちと詠んでいる。

にぎり返す力伝わる手のひらにこぼを持たぬ生徒の返

事

田上悦子

志伝達のできた瞬間を詠んだ一首。伝達の方法は、にぎり

返す力でありその瞬間の教師のよろこびと感動である。

佳作不破陽子 川上理恵 曽根明香理(十六歳)

土佐高等学校 野村季子 今井桃子(十七歳)

松原一成

国民の理解が得られることを切に願つてます。と呼びか

けられた。作者はこれを新しい象徴のかたちと詠んでいる。

にぎり返す力伝わる手のひらにこぼを持たぬ生徒の返

事

田上悦子

志伝達のできた瞬間を詠んだ一首。伝達の方法は、にぎり

返す力でありその瞬間の教師のよろこびと感動である。

佳作不破陽子 川上理恵 曽根明香理(十六歳)

土佐高等学校 野村季子 今井桃子(十七歳)

松原一成

国民の理解が得られることを切に願つてます。と呼びか

けられた。作者はこれを新しい象徴のかたちと詠んでいる。

にぎり返す力伝わる手のひらにこぼを持たぬ生徒の返

事

田上悦子

志伝達のできた瞬間を詠んだ一首。伝達の方法は、にぎり

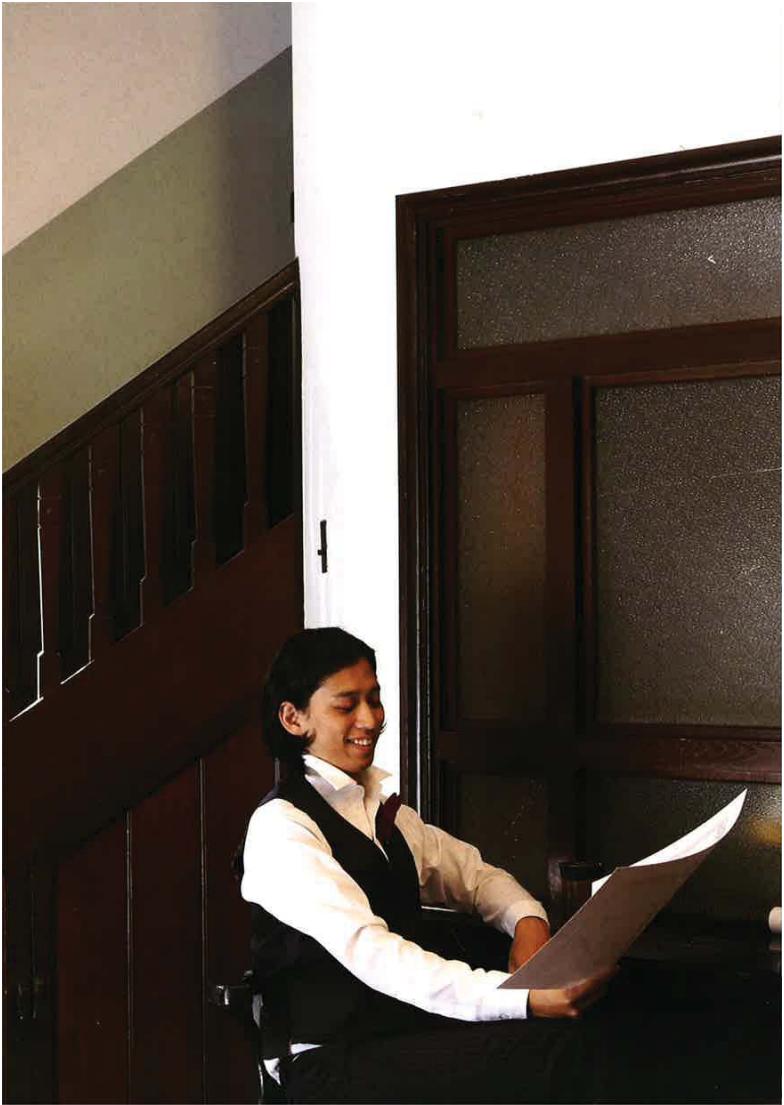
返す力でありその瞬間の教師のよろこびと感動である。

佳作不破陽子 川上理恵 曽根明香理(十六歳)

土佐高等学校 野村季子 今井桃子(十七歳)

松原一成

国民の理解が得られることを切に願つてます。と呼びか



68

*応募作品は返却しません。

*個人情報は、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。

ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。

*入選作品の著作権は、高知県及び(公財)高知県文化財団が所有します。

十三、審査員（五十音順）
短編小説…杉本雅史　米沢朝子　若江克己
詩…猪野睦　小松弘愛　長尾軫
歌…市川敦子　梶田順子　中野百世
俳句…橋田憲明　松林朝著　味元昭次
川柳…小笠原望　鶴田和広　西川富恵

十四、問い合わせ先
「高知県芸術祭執行委員会事務局」
(公財)高知県文化財団内
(TEL ○八八一八六六一八〇一三)

二〇一六年十一月二十七日 発行
編集発行 高知県芸術祭執行委員会
事務局 高知県高知市高須三五三一
(公財)高知県文化財団内
印 刷 所 高知市城山町三六
西 富 謄 写 堂
(非 壳 品)